

笑ってねえ
やっどらんねえ

飯舘村の母ちゃんたち 土とともに

出演：菅野榮子 菅野芳子

監督・撮影：古居みずえ

プロデューサー：飯田基晴 / 野中章弘 編集：土屋トカチ 整音：常田高志

宣伝協力：東風 配給：映像グループ ローボジション

製作協力：映像グループ ローボジション / アジアプレス・インターナショナル

製作：映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

2016年 / 95分 / HD / ドキュメンタリー © Mizue Furui 2016

www.iitate-mother.com

原発事故から5年——古居みずえ監督が描く
へこたれない母ちゃんたちの愛しき友情ストーリー



畑を耕し 漬物つけて 食べるものは自分でつくる ふたりで泣き 笑いながら “これから” を模索する



菅野榮子(かんの・えいこ)さんは79歳。孫に囲まれた幸せな老後を送るはずが、福島第一原発の事故で一転する。榮子さんが暮らす福島県飯館村は全村避難となり、ひとりで仮設住宅で暮らすことになった。支えは親戚であり友人の78歳の菅野芳子(かんの・よしこ)さんだ。芳子さんは避難生活で両親を亡くし、ひとりで榮子さんの隣に移ってきた。「ばば漫才」と冗談を飛ばし互いを元気づける、2人の仮設暮らしが始まった。

榮子さんの信条は、食べるものは自分で作る。ふたりで畑を耕し、トマト、キュウリ、芋、大豆、大根など様々な作物を収穫する。かぶや白菜の漬物、おはぎ、にんじんの胡麻和え…「おいしいよ」と笑顔で食卓に手料理を並べる。村の食文化を途絶えさせたくない、昔ながらの味噌や凍み餅(しみもち)の作り方を、各地に出向いて教えるようにもなった。



飯館村では帰村に向けた除染作業が行われている。だが高い放射線量、変わり果てた風景…。ふたりは先の見えぬ不安を語り合い、泣き笑いながら、これからの模索していく。



監督の古居みずえは30年近くパレスチナの取材を続けている。特に女性や子どもに焦点をあて、『カーダ パレスチナの詩』『ぼくたちは見た-ガザ-サムニ家の子どもたち-』など個人や家族に密着したドキュメンタリー映画を発表してきた。本作でも、故郷を奪われた哀しみを抱えながら、たくましく生きる女たちを丁寧に見つめていく。

原発事故から5年、未だに10万人が避難生活を続ける。避難の長期化による孤立や分断が深まるなか、私たちに何ができるのか。

本作を通じ、ともに“これから”を模索してほしい。

あれから 5年——

いまだから、見えてくること 何が損なわれたのか？ どうやって取り戻すのか？

*日時：11月20日(日) 映画 13:30~15:05 トーク 15:20~16:30 (出演者と古居監督のトーク)

*会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール (141ビル6階)

*チケット：800円(全席自由)

主催：(公財)せんだい男女共同参画財団 企画運営：特定非営利活動法人イコールネット仙台
問合せ：特定非営利活動法人イコールネット仙台 (090-1398-5065 佐藤)

email emuna@ve.cat-v.ne.jp FAX 022-271-8226